
迷子の子猫

鈴夜 音猫

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷子の子猫

【Nコード】

N7866N

【作者名】

鈴夜 音猫

【あらすじ】

極度の方向音痴、谷川唯花。
今日も今日とて迷子です。

——小さい頃から方向音痴。それは大人になっても変わらなかった。

「あつれー？ おつかしいなー」

私、^{タニガワユイカ}谷川唯花。只今迷子の真っ最中です。

「こつちだと思っただけど……ここどこだろ？」

地図を片手に右往左往して約三時間。引っ越し先に向かうため、最寄りの駅で降りたのはよかったんだけど、問題はそこからだった。自分の極度の方向音痴は自覚してたのだけど、契約で一度来たから大丈夫だと油断していた。

「はあ……どうしよ……」

さすがに途方に暮れて、道端に座り込む。うろろろしていたから足がパンパンだ。

「どうされました……？」

「ふえ？」

太ももをトントン叩いていると、上から心配げな声が降ってきた。びっくりして顔を上げた私はポカンと口を開けたまま静止した。

まさに一目惚れ。顔ではなく、佇む雰囲気。

こんなことつてあるだ、などと惚けていると彼が私の顔の前で手を振る。

「大丈夫ですか……？」

「あ……はい！単なる迷子ですから！」

勢いよく立ち上がり、私はガッツポーズをしてみせる。
そんな私に彼はきょとん顔。

「迷子って……」

「日常茶飯事ですから、お気になさらず」

笑いながら言うと、一拍置いて彼の盛大な笑い声が辺りに響き渡ったのだった。

「唯花！」

背後から切羽詰まったような男の人の声がして、すぐに腕を掴まれる。

「あ、春樹さん！」

息を切らしながら私を探してくれていたらしい愛しい人を指差す私。

引つ越してから約一年。それでも未だに迷子になる私を彼、下
モキタルキ
北春樹さんは探してくれる。

あの日、私が彼に一目惚れしたあの後、彼は私を引つ越し先まで案内してくれた。しかもご近所さんだったみたいで、何かと気にかけてくれるようになった。

「またお前は……迷子になるの分かってんだから声かけろよ!」

「だって、いつもいつも悪いし……それにコンビニ行くだけだし……」

慌てて言うと、盛大なため息が帰ってくる。

「……コンビニ、反対方向」

「え?あれ?」

混乱する私の手を取り春樹さんは歩き出す。正しいコンビニの方へ。

「全く……次から一人で行動するな」

「えー?じゃあ家から出られない……」

出られなければ買い物ができない。これは死活問題だ。

「駅までの道なら覚えたもん!」

「そら毎日通勤する道ぐらいは覚えてもらわなきゃだからな」

当然、と言われてむっとする。それはそうだけど……

「じゃあ買物どうしたらいいの？」

「俺と行けばいいだろ。なんなら買ってくるし」

事も無げに言われて若干拍子抜けする。というかそれって……

「どういうこと？」

「……」

先に行く春樹さんが呆れたように私を見る。なんか今、すっごくバカにされた気がする。

「だから、俺とずっと一緒にいろって言ってるの」

「……へ？」

言われたことを頭の中で反復する。これってまるでプロポーズ的な？

「鈍い奴……結婚してやるって言ってるだよ。お前の面倒みれるの俺ぐらいだろうが」

半まくし立てるように春樹さんが言う。いやいや、ちょっと待って。その前に……

「私達、付き合ってたの?!」

コンビ二目前の小道に響き渡る私の素っ頓狂な叫び声。次いで、春樹さんの口から漏れたのは本日最大のため息でした。

【End】

（後書き）

皆様お久しぶりです。

私の中では長めの短編となりました今回の作品、いかがでしたでしょうか？

なんともまあ、バカな女の子を書いたなあと思います。

まあ方向音痴は作者もですが、ここまでではないと信じてい…

さてさて、今回ののはちよつと続編考え中。

もし読みたいな〜と言ってくださる方がいたら頑張ります。

ここまでお読みいただきありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7866n/>

迷子の子猫

2010年10月10日15時38分発行